

徴です。最初は「これも甘酒？」と不思議そうな反応が多かったのですが、実際に飲んでみると、「美味しい！」という声がたくさん聞こえ、同じ甘酒でも日本のと全然違うことに皆驚きました。



個性豊かな手作り小丸子

さらに、留学生には和食の調理方法を試してもらいたいと思い、日本の代表的な食べ物のお寿司である「手巻き寿司」と、家庭やお祭りで親しまれている「豚汁」を作りました。好きな具材を自分で選んで巻くスタイルだったので、みんな個性が出て楽しかったです。新鮮な刺身や卵焼き、きゅうりなど、彩り豊かで見た目も美味しそうでした。



豚汁

豚汁は、野菜やお肉を切るといった基本的な調理でしたが、じっくり煮込むことで玉ねぎの甘みが引き出され、美味しく作るコツを実感できました。普段からバイトで料理をする機会が多くあるので、その経験が今回の活動にも活かされたのが嬉しかったです。また、留学生や



手巻き寿司

ゼミの中国にルーツも持つ学生にも和食の調理に参加してもらえて、日本の家庭料理を実際に食べてもらうことができ、とても嬉しかったです。

今回の活動を通して、日本と中国それぞれの料理をみんなで協力して作ることで、食文化の違いや共通点について深く学ぶことができました。企画から買い出し、調理、そして片付けまでを全員で行い、自然と会話も増え、ゼミの仲間、そして留学生との距離がぐっと近くなったように感じます。本当に貴重で楽しい時間でした。

FYS (日本文化学科) 横浜美術館・ リニューアルオープン記念展 「おかえり、ヨコハマ」展を見て

国際日本学部 日本文化学科1年

内田 咲紀・錦織 なぎさ・村田 優月

1 五月二五日(日)、私たち日本文化学科・FYS(松本クラス)では、横浜美術館で開催されているリニューアルオープン記念展「おかえり、ヨコハマ」展、および、コレクション展を鑑賞しに行きました。

この展示は、横浜にまつわるものを多角的な視点で追うような、非常に興味深いものであった。美術館自体初めての経験だというメンバーもいたが、常設展示を含め、横浜美術館を楽しめたようだった。

中でも心に残った展示について、代表者三名がまとめる(1・3 錦織、2・5 内田、4 村田)。

2 「おかえり、ヨコハマ」展の中で私が目を惹かれたのは、「第2章 みなとを、ひらけ」である。このコーナーでは主に開国した当時の横浜の様子を描いた浮世絵、いわゆる横浜絵が展示されている。

パンフレットの「みなとを、ひらけ」のコーナーの説明を彩る作品である昇斎一景の《汐留より蒸気車通行の図》(一八七二)では、いかにも洋風といった外観の駅舎と、当時は開通して間もなかったであろう蒸気機関車が描かれており、開国した当初、「外国風」のものがいかに珍しく思われていたのかがうかがえる。

展示作品の中で、同じく蒸気船を描いた歌川広重(三代)の『横浜海岸鉄道蒸気車図』では、蒸気機関車の奥に見える横浜の港と、その港に浮かぶ数々の船が横浜の開港を象徴しているようである。さらに、この浮世絵に描かれた蒸気機関車には赤色が使われている。開港以前は赤色の絵具の顔料には紅花という植物が使われており貴重なものもあったが、開港して外国から比較的安価で手に入る、発色の良い赤色の絵具が流通したという事情を、蒸気機関車に使われた色からも垣間見ることができ、鑑賞することにおいて非常に楽しい作品となっている。

3 私は、「おかえり、ヨコハマ」展の、「第6章 あぶない、みなと」に心惹かれた。このセクションでは、戦後占領期の横浜の写真が多く展示されており、外国の兵士に囲まれる女性など、不穏な様子のもものも少なくなかったが、それだけではない。写真の中の銭湯帰りであろう女性たちや笑顔の子どもたちは、決して不幸には見えなかった。私は、彼女らの不安定な世の中でも日々を楽しむ力強さに魅力を感じた。

ところで、私は「おかえり、ヨコハマ」展の「ヨコハマ」が、なぜカタカナで表記されているのかについて、一つの仮説を立てた。「ヨコハマ」とは、ただ単純に横浜市を指しているのではなく、いつからどこからだから、多様な視点から見たこの場所が「ヨコハマ」であると考えた。

4 私が、今回鑑賞した作品の中で最も感動したのは、「新収蔵作品特別展示——浅井裕介

《八百万の森へ》(二〇二二)という作品である。この作品は、横浜信用金庫が創立100周年の記念事業として、二〇二三年に横浜市文化基金に寄附を行ったことをきっかけに制作され、横浜美術館に収蔵されたものだというのである。横浜市内各所の土を絵の具として使用し、九枚のパネルを組み合わせたこの作品は、高さ約三メートルもあり、圧倒的な迫力と存在感を放っていた。

土が使われているからなのか、《八百万の森へ》は強い生命力を感じる作品だった。見ているだけなのに、まるで自分が絵の中に入り込んでしまうような、このままこの空間から動けなくなってしまうのではないかと思わされるほど、一目見た瞬間から作品に引き込まれた。

この作品は九枚のパネルで構成されているので、組み合わせのパターンが七種類も存在するそうだ。今回見たのは、その七パターンのうちの一つだけだが、他のパターンによってはまた別の見え方、感じ方になるのだろうか。どう組み合わせるかで絵が変化するという点が、刻一刻と変化する自然そのものを表しているようにも感じた。

今回の美術館の鑑賞では、多くの刺激を受けた。この経験を自分のこれからの活かしていきたい。

5 「おかえり、ヨコハマ」展は、私たちに馴染みのある土地である横浜の過去について、視覚的に知る経験を与えてくれた。

かつての横浜で培われた文化と人々の営みが、私たちの生きるここからの横浜をさらに魅力的な街へと育んでいくことを願いたい。



島川ゼミナール 軍艦島に見る 産業遺産と観光の未来

——長崎研修レポート——

国際日本学部 国際文化交流学科

観光文化コース 島川崇ゼミナール

私たち島川ゼミナールは、観光業界や公的機関において、地域の魅力を発信し、持続可能な観光を支える人材の育成を目指して日々活動を続けています。ゼミでは「旅行業および集客施設の企画と運営の実践的アプローチ」というテーマのもと、旅行会社やディベロッ

パーと連携したプロジェクト型の学習を重視し、教室を飛び出した実地体験を通じて、実務感覚を養っています。

2025年度の取り組みの一つとして、箱根・強羅にある函嶺白百合学園高校2年生の修学旅行における長崎での自由行動プログラムの企画・提案を行っています。この実習では、受け手である高校生にとって「学びのある体験」を提供することが求められるため、私たち自身が現地を訪れ、体験に基づいた企画を立案する必要があると考えました。そこで、ゼミ生有志で2泊3日の長崎研修旅行を実施することとなり、その目玉として選んだのが、近年国内外の注目を集めている世界遺産「軍艦島(端島)」の訪問です。

◆産業遺産の象徴、軍艦島へ

長崎港から南西約19kmの海上に浮かぶ端島、通称「軍艦島」。かつて海底炭鉱で栄え、最盛期には東京以上の人口密度を誇ったこの島は、昭和49年(1974年)に閉山し、無人島となりました。現在では、「明治日本の産業革命遺産」の構成資産のひとつとして、製鉄・製鋼・造船・石炭産業の近代化を物語る貴重な文化遺産として保存されています。

軍艦島という名前は、島の外観が戦艦「土佐」に似ていたことから名付けられたものです。海上から見るその姿は、まさに鉄とコンクリートの要塞のようで、私たちのような観光を学ぶ学生にとっても圧倒的な存在感を放っていました。

訪問にあたっては、事前に世界遺産の意義や日本の産業近代化の歴史についての学習を行い、ただの「物見遊山」ではなく「学びの旅」としての準備を整えました。当日は、株式会社シーマン商会様が運営するク